



捻くれ者の恋（体験版）



*Imagination's Block*

この度は“捻くれ者の恋（体験版）”をダウンロード頂きありがとうございました。

この体験版では、物語の冒頭部にあたります序章から第一章の前半までお読み頂く事が可能です。体験版をお読み頂いた上で、製品版の購入をご検討頂ければ幸いに存じます。

Imagination's Block へのへの拝

◆製品版と体験版の相違について◆

製品版と体験版には相違点がございます。製品版購入の前に以下をご一読下さい。

1. ページ数  
体験版…全 40 ページ  
製品版…全 340 ページ
  2. キャラクター紹介  
体験版…主要キャラ 2 名  
製品版…主要キャラ 6 名
  3. コンテンツ（目次）  
体験版…序章、第一章の前半のみ表示  
製品版…全章、その他（サービスカット等）表示
  4. 画像  
体験版…一部画像のみ表示  
低画質、TRIAL 文字・横線ノイズ入り  
製品版…全画像表示  
高画質、TRIAL 文字・横線ノイズ無し
  5. Information（このページの事です）  
体験版…有り  
製品版…無し
- 
-

---

---

## Character



*Kevin · C · Olson*

ケヴィン・クラレンス・オルソン

身長：163 cm 年齢：18 歳

職業：学生

(王立学院 大学院 修士課程  
自然科学研究科)

※ ヴァレリア公爵家 三男

※ キム・ケアードとして工部省に潜入

*Roland · Langridge*

ローランド・ラングリッジ

身長：185 cm 年齢：27 歳

職業：最上級官吏

(工部省 設計・施工部)

※ ラングリッジ家 次男

※ プレイボーイを気取るお人好し



◆ キャラクター紹介について ◆

体験版につきキャラクター紹介は主要キャラ 2 名となっております。

---

---

---

---

## Contents

序 章	不可解な仕事	5
第一章	工部省潜入	18
第二章	*****	***
第三章	*****	***
第四章	*****	***
第五章	*****	***
第六章	*****	***
第七章	*****	***
第八章	*****	***
終 章	*****	***
	*****	***
	*****	***
	*****	***

---

---

捻くれ者の恋（体験版）

*Presented by Imagination's Block*

© Imagination's Block 2008

*Illustration* へのへの

<http://www15.plala.or.jp/mini8/index.html>

※ この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件  
とはいっさい関係ありません。

---

---

捻くれ者の恋（体験版）

## 序 章 不可解な仕事

街道沿いにずらりと並ぶポプラが、黒々とした枝を青い空に向けて広げている。未だ芽吹きを知らぬように見えるその黒い枝につく芽は、いち早く春の訪れを知り、硬い殻を大きく膨らませていた。

ひたひたと忍び寄る春は、街道を取り囲むように広がる田園を覆い尽くしていた雪を溶かし、今にもう僅かばかりの残雪を残す程度にしている。数ヶ月ぶりに姿を現した大地は、雪解けの水をふんだんに含み、艶やかな黒さを増して麗らかな日差しを受けて輝いていた。

ロイアレーナ国内でも南部に位置する王都キャスタルの春は早い。そんな王都の中でも移り変わる季節を余す所なく見せてくれる郊外の街道を、一台の馬車が南下していた。

石とレンガで覆われた市街地を抜けた馬車は、春

かすむ田園地帯へと向け、緩やかに突き進む。一帯に広がる風景を目にした御者台に座る御者は、頬を緩ませ、春の息吹を感じさせる温かな空気を胸一杯に吸い込んだ。

「ケヴィン様、ご覧下さい。ほら、もうあんなに雪が溶けて。すっかり春ですねえ」

清々しい春の息吹を吸い込んだ御者が、浮き立つ心のままに背後を振り返る。だが、漆黒の大地よりも黒い車内から返ってきた答えは素っ気無いものだった。

「悪いけど話し掛けないでくれるかな。今、計算中なんだ」

移り行く季節になど無関心、とばかりの主の返答に、御者は隣に座る助手に肩を竦めてみせる。そんな御者に、助手は苦笑を浮かべた。

車中にいる主は春の訪れよりも難しい計算の方が気に係るらしい。まるで理解出来ない記号を操り、万物を解き明かそうなど御者や助手から言わせれば

変人のする事だ。そんな難しい事をするよりも肌で季節の変わり目を感じ、これから始まる美しい季節を想像する方が有意義だ。それを目線だけで語り合った御者とその助手は、どちらともなく前を向き、生ある季節へと向かう田園風景に目を細めた。

街道から脇道に入った馬車はヴァレリア公爵家の敷地に入り、大きな正門を潜る。そこから更に敷地内に敷かれた道を通り、やや暫くして馬車は速度を緩め、やがて大きな屋敷の前で停車した。

「ケヴィン様、お屋敷に到着致しました」

声を掛けられたケヴィンは紙面に落としていた顔を上げ、開かれた扉の向こうに立つ御者助手に目を瞬いた。

「もう？」

「はい、到着致しました」

恭しく頭を下げる御者助手の背後には、見覚えのある大きな両開きの扉が見える。確かに到着してい

る事を知ったケヴィンは、一つ大きな溜息をつき、熱心に見ていた書類を鞆の中にしまった。馬車を下りたケヴィンは乾いた石畳を踏んで正面玄関前の階段に足を掛ける。それとほぼ時を同じくして、登り切った先にある扉が開き、見知った家令がその向こうから現われた。

「お待ちしております、ケヴィン様」

開け放った扉の横に控えた家令が恭しく頭を下げる。さも待ち構えていた、と言わんばかりの彼の言葉と態度に、ケヴィンは小さな溜息を漏らした。

「父上は？」

「応接室でお待ちになられておいでです」

「……そう」

答えながら階段を上ったケヴィンは、先んじて歩く家令の背中を見つめながら正面玄関を通り、屋敷の中に入った。

どうやら父親は単なる気まぐれでケヴィンをここへ呼んだのではないようだ。父親が気まぐれで呼び

つける時、彼はいつも玄関先でケヴィンを出迎え、暑苦しい抱擁を求めてくるのが常だ。だが、今回はそんな父親が応接室で待っている。恐らくは客人がいて、部屋を出て来られないのだろう。

——オレを誰かに会わせるつもりか……。まさか見合いなんて事はないよな？

ふと考えた忌々しい想像に、ケヴィンは顔を顰めた。

有り得ない事ではない。先年夏に一八才の誕生日を迎えたケヴィンは既に成人している。未だ学生の身ではあるが、同じぐらいの年頃の者の中には既に婚約者がいる者も多い。成人前は色恋沙汰など二の次三の次に出来たが、成人してしまった今、父親にはそれが通用しないかもしれない。

と、そこまで考えて、ケヴィンは重要な事を失念している事に気付いた。

——そう言えばサイラスも婚約者がいなかったな。長兄であるサイラスは結婚は愚か婚約もしていな

い。それなのに、ケヴィンにお鉢が回ってくる事など有り得ない事だった。そう考えたケヴィンがホッと胸を撫で下ろす中、前を歩いていた家令が応接室の前で立ち止まり、扉をノックした。

「旦那様、ケヴィン様をお連れ致しました」

「入りなさい」

家令の呼び掛けに扉の向こうから父親が入室許可を与える。それに答えた家令が静かに扉を開き、頭を垂れた。入室を促されたケヴィンは、いったい誰がいるのだろう、と思いつつ室内に足を踏み入れる。

「ケヴィン！」

「は？」

応接室に入った途端、その場にいるはずのない者の顔が目に入った。彼はケヴィンの名を呼び、室内中央にあるソファから立ち上がってこちらに駆け寄ってくる。自分同様、未だ少年の面差しを残す男に抱きつかれて、ケヴィンは驚きに目を瞬かせた。

「どうしてキムがここにいるんだ？」



問うて抱きつくキムの肩を押すと、彼は再会を大いに喜ぶ顔をしたまま答えた。

「うんとね、一ヶ月ぐらい前からここでお世話になっ  
っているんだ」

「は？」

思ってもよらないキムの返答に、ケヴィンは益々目を丸くした。

「一ヶ月って、どうして？」

疑問だらけの事態に、更にキムに質問を投げ掛けると、彼の顔が曇った。

「……父さんが……」

ポツリと呟いたキムの目に見る間のうちに涙が滲んだ。その涙が頬を伝い、いく筋もの跡を残す。キムは最初のうちこそ唇を噛んで耐えていたが、やがて耐えられなくなったのか、ケヴィンの肩に顔を埋め、嗚咽を漏らし始めた。

——いったい何なんだ？

ケヴィンは訳の分らない展開に、ただ困惑し、目

を瞬き続けた。

——訳が分らない。

泣きじやくるキムを客用寢室に連れて行き、慰め、寝かしつける事に成功したケヴィンは、廊下を歩きながら思考を巡らせた。

キムは泣きながら父親の死を口にしていた。こよなく父親を愛していた彼が、父親の死を知って泣きじやくるのは理解できる。だが、その事を何故ケヴィンの父親であるヴィクトルから知らされなければならぬのかが分らない。

キム・ケアードとケヴィンは学部は違えども学舎を共にする間柄だ。だが彼の父親であるハワード・K・グレアム氏とケヴィンの父親であるヴィクトルとは何の繋がりも無いはずだ。父親は共に官吏ではあるが、グレアム氏は工部省に勤める一官吏であるのに対し、父ヴィクトルは官吏の頂点に君臨する宰相である。いくら父親の顔が広いからといって一官

吏でしかなかったグレアム氏を知っている可能性は相当低いに違いない。

それに、キムはグレアム氏の隠し子である為、公には彼らが親子の関係にある事は知られていない。その事をケヴィンはキムから聞いて知っていたが、父ヴィクトルには一度としてその事を話した事はない。それなのに父ヴィクトルが何故、キムとグレアム氏の関係を知っていたのか、疑問だらけだった。

——いったい何を企んでいるんだ？

策略好きな父親の性格を考えたケヴィンは、ここ呼びつけられた理由を考え、眉間に深い皺を寄せた。

父親はどうせまたロクでもない事を考えているに違いない。今年の初め、新王登極の折に新宰相となった父親は表向きは大人しくしているように見えるが、裏ではこそそと何かをしている。政治と縁のないケヴィンには、具体的に何をしているのかまでは分らない。だが、強かな父親がする事だ、きっと

とんでもない事に決まっている。

——絶対に巻き込まれてなんかやるものか。

心の中で硬く決意し、ケヴィンはノックもなしに父親の部屋の扉を勢い良く開いた。

「やあ、ケヴィン。待っていたよ」

扉を開いた途端、目が合った人物の顔を見て、ケヴィンは口元を引き攣らせた。

父親を問い詰めようと勢い良く部屋に飛び込んだまでは良かったが、待っていたのは父親と長兄サイラスだった。サイラスは父親同様、強かで油断のない男だ。この二人がタッグを組んでしまったのならば、いかにケヴィンといえども太刀打ちするのは難しい。

ここは早々に帰宅すべきだ。それ以外難を逃れる術が無い。そう判断し一步退こうとした瞬間、背後に人の気配を感じ、ケヴィンは後ろを振り返った。

「ケヴィン様、さ、お席にお付き下さい。お茶の用意が整ってございます」

につこり微笑む家令の背後には大きなワゴンが置かれていた。そのワゴンは完全に出入口を塞ぎ、ケヴィンの逃走ルートを断っていた。

——やられた……。

タイミングの良さから考えて、家令もグルなのであろう。完璧に父親と兄の策略に嵌ってしまったケヴィンは、逃げる事も出来ずに、渋々父親と兄の座るソファに歩み寄り、不貞腐れた顔のまま彼らの前の席に腰を下した。

「また下らない事を考えているんだろ」

ケヴィンはブスツとしたまま言葉を紡ぎ、ふてぶてしくも肘掛に肘をつき、手の甲に顎を乗せ、目の前に座る父親を睨み付けた。

「おいおい、久しぶりに会ったというのに挨拶もなしかい？」

横に座る長兄サイラスが苦笑交じりに話し掛けてくる。それを無視したケヴィンは、テーブルに茶器を置いた家令が出て行くのを待って、言葉を發した。

「どうしてキムがグレアム氏の息子である事を知っているんだ？」

この二人にまどろっこしい言い回しなど無用だ。

単刀直入に切り込めば的確な答えが返ってくる。それを知っているケヴィンが聞きたい事を口にする、予想通り直球で答えが返って来た。

「先日、私はグレアム氏とお会いしてね。その時にご子息の保護を頼まれたのだよ」

不可解な事を言う父親に、ケヴィンは目を瞬いた。

「どうしてグレアム氏がキムの保護を父上に頼むんだ？」

「グレアム氏は私にある書類を渡したがっていた。

その書類は少々厄介なものでね。もしかしたら息子にまで危害が及ぶかもしれない、そう考えた彼は私にキム君を預けたのだよ」

父親はいつも通り何を考えているのか分らない微笑を浮かべている。だが、父の言った書類というのが相当に厄介な物である事は容易く想像出来た。

ケヴィンはあえてその事には触れず、別の問いを投げ掛けた。

「グレアム氏の死因は？」

「……事故だよ。自宅近くの路上で馬車に跳ねられてしまっただけ。そのままご他界なされた」

——事故、だって？

予想外の答えにケヴィンは目を瞬いた。てっきり書類の所為で殺されたのかと思っていた。

「その事故に不審な点はないのか？」

「無いよ。グレアム氏をひいた馬車を操っていた御者は、彼とは縁も縁もない辻馬車屋だ。その人物に怪しいところは一つもない。まあ、グレアム氏が突然車道に飛び出した事が不自然といえど不自然だが、それは彼が深酒をしていた所為として片付けられないくもない」

父親の代わりに答えたサイラスの表情に嘘はない。だが、少々気になる点はある。子供を保護させるぐらいだからグレアム氏自身の身にも危険はあったはずだ。そんな状況にある者が車道に飛び出した事にも気付かぬほど深酒をするものだろうか。

考え込んでいる自分に気付いて、ケヴィンはハツとした。気付けば父親と兄の視線がこちらに集中している。危うく二人の術中に嵌ってしまうところだった、とケヴィンは視線を明後日の方向に向けた。

「書類を持っていたグレアム氏が亡くなったのならキムの危険も去ったんじゃないのか？」

これ以上の深入りは禁物だ。そう思っただけで呟いた言葉に、兄サイラスが首を振った。

「そう簡単には言い切れないんだ。グレアム氏は書類を何処かに隠してしまっていてね、その書類は未だに見つかっていない。無論、敵の手で回収された気配もないのだよ」

——敵……。

兄サイラスは極々自然に「敵」という言葉を使った。だが、その言葉は単にグレアム氏にとっての敵、という意味ではないはずだ。父親も兄の言葉を訂正

しようとはしない。恐らくここで言う「敵」とは父親や兄にとっても敵、という意味なのだろう。

——やっぱり政治的な話だな……。

父親と兄の意図をハッキリと認識したケヴィンは我関せずという風に肩を竦めてみせた。

「それとキムとどんな関係があるって言うんだ？  
例えば書類が回収されていなくても、キムには関係のない事だ。敵とかいう奴がキムを捕まえても、それには何のメリットもない」

そう、キムには関係のない話だ。

グレアム氏が健在であれば隠し子とはいえキムは彼のネックになる。だが、書類を隠した当の本人であるグレアム氏が亡くなった今、キムを拉致してグレアム氏に書類の隠し場所を教えろと脅す事も出来ない。グレアム氏が亡くなった時点で、キムに降りかかる脅威は去ったのだ。

その点をふまえて素っ気無く言葉を吐き捨てると、父ヴィクトルの顔から笑みが消えた。

「グレアム氏は私に言ったのだよ。書類の隠し場所はご子息のキム君が知っている、とね」

「な……」

父親の言葉にケヴィンは言葉を失った。書類の隠し場所をキムが知っているのならば、その書類をどちらかが回収しない限り、彼は永遠に狙われ続ける。そして、その書類に書かれている内容が危険なものであればあるほど、キムの身に迫る危険度も跳ね上がるだろう。

——それでキムを保護しろと……。いったい、その書類には何が書かれているんだ？

敢て無視した書類の内容が気にかかる。だが、それを聞いてしまえば、自分は父親と兄の思惑にどっぷり浸かってしまう事になるだろう。

——ここはやはり何も聞かなかった事にして部屋を出るべきだ。

キムには悪いがロクでもない父親と兄に係わるのは真っ平御免だ。ケヴィンは心の中に浮かぶキムの

泣き顔を無理矢理追ひ払ってソファから腰を上げた。  
「キムが隠し場所を知っているのなら早目に回収に向かうべきだ。父上の優秀な従者に命ずれば簡単な事だろう。オレは失礼させてもらう」

素っ気無く言ってケヴィンがこの場を立ち去ろうと一步を踏み出した時、大仰な溜息が室内に響いた。

「それがねえ……」

「駄目なんだ」

溜息混じりの兄の言葉を聞いた父親が同様の仕草で結論を述べる。何とも息の合い過ぎる二人に、ケヴィンは顔を歪めた。

「何が駄目なんだよ？」

聞きたくはなかったが取敢えず聞いてみる。すると、二人は互いに顔を見合わせてからケヴィンに視線を向けてきた。

「鍵がね、ないんだよ」

「そう鍵がないのだ」

兄の言葉を受けた父親が同意するように頷き、同

じ事を言う。勿体ぶるような言い回しをする二人に苛立ちを覚えたケヴィンは、二人を交互に睨み付けた。すると、その睨みに父親は苦笑を漏らし、ようやく鍵の事を口にした。

「グレラム氏は、書類の保管場所に鍵をかけていると言っていた。その鍵は後日、私に渡してくれる予定だったのだが、その前に彼は亡くなってしまったのだよ。彼は屋敷に鍵を置いておくと危険だから、信用のおける人物に預けていると言っていた。グレラム氏は然程、交友関係の広い人ではないから直ぐに鍵を預けたであろう人物には検討がついた。だが、我々が出て行けば大事になる。そこでお前に来てもらったのだよ」

大切な書類の保管場所に鍵をかけるのは至極当然な事だ。それに、宰相である父親と王の側仕えをしている兄が出て行けば大げさな事になるのも理解出来る。だが、鍵があるなら壊せば済む事だ。それに、いくら大げさな事にしたくないからといって何故自

分がわざわざ出向かなければならないのかが分らない。

ケヴィンは苦いものを噛み締めるように顔を顰め、父親と兄を交互に見やった。

「鍵など壊せばいいだろ。だいたい何故オレが必要なんだ？」

自分の名前を出される事すら不愉快だ。そういう顔をして問うと、父親の顔に強かな笑みが浮かんだ。

「来月実施される公的機関に学生を受け入れる研修制度があるだろう。それに参加し、グレアム氏の勤めていた工部省に行ってもらいたい。無論、キム・ケアードとしてね」

「は？」

ケヴィンは素っ頓狂な声を発し、鳩が豆鉄砲でも食らったような顔をした。

研修制度とは今年から実施されるものだ。優秀な人材を確保したい国家機関が王立学院に通う優秀な学生を招いてどのような業務を行っているかを一ケ

月かけて公開する。国家機関側はその時にものになりそうな学生に目をつけ、卒業前にアプローチする事が出来る。そして、学生側には興味のある国家機関が自分の就職先として適しているかを事前に判断できる利点がある。その為、王立学院に通う学生の中にはこの研修制度を利用したがつている者が多い。しかし、ケヴィンは特にその研修制度に参加したいとは思っていないかった。国家に従属する官吏になどなりたくはないし、政治にも興味はない。だから、先日学長に参加を促されたが、断ってしまった。

いや、そんな事はどうでもいい。この際、研修制度の事はおいておいて、何故、自分がキム・ケアードにならなければならないのかが問題だ。

ケヴィンは表情を正し、ずいとお父親に顔を近づけた。

「何故、オレがキムにならなければならないんだ？キムは敵とかいう奴に狙われているんだろ？ あい

つになって工部省なんかに入ったらオレが危険じゃないか」

「お前が私の息子として工部省になんか研修に行ったらどうなる？」

「それは……」

言い淀んでケヴィンは眉間に深い皺を寄せた。

自分が宰相の息子である事を隠さずに研修に参加すれば、工部省の上層部が上を下への大騒ぎになってしまう。彼らはきっと自分を特別扱いし、四六時中付き纏っておべつかを言うてくるに違いない。

ケヴィンが微かに呻き声を漏らして口をへの字に曲げると、父親が笑みを浮かべた。

「大丈夫。キム君の存在を知っている者は工部省内にはいない。工部省にはキムの兄、クレイグがいるが、グレアム氏はキムの事を一度もクレイグには話した事がないと言っていた。万が一クレイグが弟の存在に気付いていたとしても、兄弟は面識がない。だから、お前さえ近付かなければ同姓同名の別人と

思うだろう。それに、書類の隠し場所を知っているのがキム君だと知っているのは我々だけだ。その情報に敵に漏れている気配はない。お前が工部省にキム君として入っても特に危険はないよ」

ニッコリ微笑んで言う父親は重要な事を言っていない。ケヴィンはすかさずその事を問い質した。

「危険がないのは分った。でも、重要な事を言っていない。オレをキムに仕立て上げて何をさせる気なんだ？」

「鍵を持っているとおぼしき人物は工部省内にいるグレアム氏の極親しい人物だ。その人物に近づくらば隠し子とはいえ彼の息子である方がいいだろう。研修期間中に何とかその人物に接近した上で鍵を手し、書類を回収して欲しい」

——なるほど……。

確かにそうかもしれない、そう思った途端、ケヴィンは父親から顔を離して納得しようとする思考を振り払った。



いくら危険がないとはいえ、父親や兄のやる事になんか首を突っ込みたくはない。この二人が寄ってたかって欲しがる書類なんて、恐らく政治上の駆け引きに使われるような危ないモノだ。例え回収だけとはいえ、そんなモノに係わりたくはない。だいたい、研修になんて行ったら一ヶ月も無駄な時間を過ごすことになる。新作蒸気機関の燃料効率を上げる実験を、その間中止しなければならぬなんて真っ平御免だ。

自分には何のメリットも無い話だ。そう判断したケヴィンは、立ったまま父親と兄を見下ろし、肩を竦めて見せた。

「悪いけどオレは研修にも行かないし、書類の回収もしない。そんな暇があるぐらいなら実験をしていたいんでね」

ハッキリ断ると、父親の眉根が寄った。

「お前は友達がいのない子だねえ。キム君がこのままずつと学院にも戻れず、隠れてこそこそ生きて行

かなければならぬでもないのかい？」

「キムとは友達という訳じゃない。あいつが勝手に懐いてくるだけだ。それに、そんな事は父上がなんとかすればいい。元々、キムの身の安全は父上が引き受けたんだから」

そんな脅しには乗らない。心の中でそう考えながら言葉を吐くと、視界の端に何かを手を持つ兄の姿が映った。

「ケヴィン。これ欲しくないかい？」

問い掛けてきた兄の声がやたらに粘っこい。何か企んでいるのは明白だが、取敢えず視線を向けてみる。

その瞬間、ケヴィンは即座に表情を明るくものに変えた。

「それは」

「そう。アストラダの学者が書いた最新の熱力学学术论文を纏めた本だよ。ひょっとしたらお前の研究に役立つかなーと思って取り寄せたんだ。これっ

て非売品なんだってね、向こうの知り合いに頼んでやっと手に入れてもらえたんだ」

兄が持っている本は、今ケヴィンが最も欲しいと思っている本だ。だが、彼が言う通り、その本は非売品の上、極端に刷られた部数の少ない本で、なかなか手に入れる事が出来なかった。

ケヴィンがその本を初めて見たのは半年程前の事だ。本は技術先進国である北方の大国アストラードから来た物理学者が持っていた。彼はケヴィンが学んでいる物理学の教授の家に厄介になりながら、この国の技術状況を視察していた。無論、アストラードに比べて技術が遅れているロイアレーナで彼が学ぶモノは何一つ無い。その為、彼は視察の合間にその本を開き、思考を巡らせているのが常だった。丁度、彼が本を開いている時にたまたま側を通りかかったケヴィンは、本を見せてもらった。ほんの僅かな時間しか見られなかったが、そこに書かれている理論は斬新で面白く、ケヴィンを夢中にさせた。そ

の時から本を手に入れたと思っていた。ほんの僅かな時間ではなく、じっくり本の中身を読み解き、検証してみたいと思っていたのだ。

その本が、今、自分の目の前にある。ケヴィンはごくりと唾を飲み込み、兄の持つ本の表紙を穴が開くほど見つめた。

——ほ……欲しい……。

欲してはならない。本を欲すれば確実に父親と兄の策略に嵌ってしまう事になる。そうは思っても、ケヴィンは視線を本から反らす事が出来なかった。

——アレがあれば新型蒸気機関の構想が纏まるかもしれない。

そう思った途端、ケヴィンの中で拒絶する心が完璧に挫けた。

「あ……その本をくれるならやってやらない事もないかなあ……」

一旦、本から視線を反らした上で表情を改め、何食わぬ顔で言ってみる。すると、父親と兄が同時に

破顔した。

「そう言ってくれると思っていたよ。ケヴィンなら絶対にやってくれると。そうですよね、父上？」

「ああ、それでこそ我が息子だ」

強かに笑い合う父親と兄を尻目に、ケヴィンは策略に嵌ってしまった愚かさを忘れ、じっと本を見つめ続けた。

## 第一章 工部省潜入

### 1

王宮へと向かう通りを歩きながら、ケヴィンは春の空を見上げた。

一面に巻層雲がかかる空は普段の青さを失い、春独特の淡さをしている。頬を撫でる風は厳冬の頃とは打って変わって穏やかで温かく、街路樹に芽吹き始めた薄緑色の新芽を揺らしていた。地に視線を落としてみると、通りを行交う人々は皆、厚手のオーバーコートの代わりに薄手のコートを身に纏っている。そして皆、生ある季節を謳歌するように表情まですっきりしている。

季節とは不思議なものだ、とケヴィンは思考を巡らせた。

ほんの少し地軸が傾いている事によって引き起こ

される自然現象には、人々の心を動かす力まである。

いや、この場合、空に浮かぶ太陽を不思議に思うべきだろう。あの天体は遙か彼方に浮かぶ天体であるにも係わらず、この地上にまで届く熱量を持っている。しかも、あの天体は人の歴史が始まるずっと以前からそこにあり、遙か古より輝き続けているのだ。――あれほどの熱量と持続性を持つ燃料とはいったいなんなのだろう？

浮かんだ疑問がケヴィンの頭の中に元素記号表を浮かび上がらせる。そんな中、不意にその表を打ち消してしまうような怒声が耳に入った。

「お前、止まれと言っているだろう!!」

横合いから怒声が聞こえた直後、物騒な長槍が行く手を阻む。それに驚いたケヴィンは仕方なく一旦、思考を止め、ムツとする感情のままに槍を持つ人物に視線を向けた。

「なんだ？」

いいところを邪魔しやがって、と続けた言葉

を呑み込んで問うと、警備兵のような格好をした男は、ケヴィンに掌を上にして手を突き出してきた。

「官吏以外の者がこの門を通る場合、身分証の呈示を求めている。身分証を見せたまえ」

「門？」

ふと気付けば、目の前には王宮西にある官吏専用通用門があった。いつの間にか目的地に到着していたらしい。その事に気付いたケヴィンは、「ああ、そうか」と暢気な声を発し、ポケットに手をつ突っ込んで、王立学院の学長に貰っていた紙を取り出し、それを折り畳んだまま門兵に渡した。

「お前、研修生なのか？」

面倒臭そうに紙を開いた門兵は、紙面を見た直後顔を上げ、不審げに眉を顰める。そんな彼にケヴィンは肩を竦めてみせた。

「小さいからそうは見えないかもしれないけど、これでも王立学院で学ぶ大学生なんだ。そこにも書いてあるだろう？ 通ってもいいか？」

門兵は言い方が気に入らなかったのか顔を顰める。自分の人当たりが悪いのはいつもの事だから気にはならない。ケヴィンは口をへの字に曲げた門兵に、もう一度問い掛けた。

「通るよ？」

「ああ」

短く答えた門兵が持っていた紙をケヴィンの手に押し付け、背中を向ける。ケヴィンはそんな彼から視線を反らし、一步踏み出して即座に歩みを止めた。「おいあんた、これから毎日オレを呼び止めて書類を確認するのか？」

背中を向けて行こうとする門兵を呼び止めると、彼はムスツとしたまま振り返って首を振った。

「お前さんの顔は覚えた。二度と呼び止める事はないから安心しろ」

「あ、そ」

一々呼び止められるのなら、毎朝首から書類をぶら下げてこようかと思っただが、その必要はないらし

い。どんな形でも顔を覚えてもらえたのは幸運だった。ケヴィンは、毎朝身分を確認される煩わしさから開放され、足取りも軽く通用門を通り抜けた。

工部省の正面玄関前に立ったケヴィンは、荘厳な石造りの庁舎を見上げ、溜息を漏らした。

ここはキムの父親であるグレアム氏がつい最近まで働いていた場所だ。

約二ヶ月前、グレアム氏は事故で他界してしまっただから、もうここにはいない。だが、彼は亡くなる前に何か重要な書類を残している。その書類を回収するのがケヴィンに与えられた仕事だ。仕事なのだが……。

——なんでこんな面倒な仕事を引き受けてしまったんだろう……。

ケヴィンは腰に手を当て、肩を落とし、大きな溜息を漏らした。どうせ研修に行くのなら知識が活かせる研究機関に行きたかった。土木や建築を生業と

する工部省なんて、物理学を専攻するケヴィンにとっては全く勉強にならない場所だ。こんな所に来てもケヴィンには何一つプラスになる事はない。

力学を重視した奇抜な橋の設計をさせてくれるのならまだ遣り甲斐もあるのだろうが、学生になんてそんな大きな仕事は回ってほこないだろう。やらされるとすれば、きつと書類の整理とか清書とか雑用まがいの仕事ばかりだ。

「ああ時間の無駄だ……」

声に出して言うと、本当に無駄な気がして帰りたくなってしまう。だが、ケヴィンは脳裏に熱力学の本を思い浮かべ、グツとその場に踏み止まった。

——オレのやる事は無駄じゃない。あの本を手に入れる為なら何だってやってやる！

熱力学の本が手に入るのならば、それにかかる労力など惜しみはしない。ケヴィンは、グイツと顔を上げ、肩を怒らせて工部省の正面玄関前にある階段を上った。

正面玄関の扉を通り抜けたケヴィンは、エントランスホールの中を見回した。ここから何処へ行けばいいのか分らない。誰に聞けばいいのだろう、と周囲を見回してみると、ホールの奥に受付係の座るカウンターのあった。

カウンターには若く美しい黒髪の女性が座っている。恐らく彼女に聞けば分るだろう。ケヴィンは、出勤してくる官吏達の間を縫って受付カウンターに歩み寄った。

「あの」

「あら？ あなた何処から入って来たの？ ここは子供の来る所じゃないわ。警備兵に見つかったら大変よ。見つかる前に帰ったほうがいいわ」

ケヴィンの呼びかけに受付の女性は驚いたような顔をして周囲を見回す。そんな彼女にケヴィンは持っていた紙を呈示した。

「あら嫌だ、ごめんなさい。あなた研修生だったのね」

紙面を見た受付の女性は、驚きに目を見開き、頬を赤く染めた。同じ間違いでも可愛らしい分、門兵よりもずっと彼女の方が好感が持てる。

ケヴィンは少々柔らかめの苦笑を浮かべ、彼女に問い掛けた。

「気にしないで下さい。僕、よく子供と間違われるんです。それよりも研修生が何処に行けばいいのかわりませんか？」

よく子供と間違われる、その言葉を言う時に大げさに肩を竦め苦笑を深くすると、受付の女性はクスリと笑い、笑みを深くした。

「ええ、知っているわ。そこに階段があるでしょう。その階段を三階まで上って左に曲がるの。真っ直ぐ歩いて行くと研修生控え室と大きく書かれた部屋があるわ。研修生はその部屋に集合する事になっているのよ」

ケヴィンは、受付の女性が指差した階段を確認してから、彼女に笑みを向けた。

「ありがとう。お礼に今度あなたに似合う花をプレゼントしますね」

「まあ、嬉しいわ」

ケヴィンの言葉を半信半疑に受け取ったらしい受付の女性は、おませな子供に向けるような笑みを浮かべている。ケヴィンはそんな彼女に手を振って背中を向け、ニヤリとほくそ笑んだ。

——可愛らしい感じの女だからピンクのガーベラがいいな。大きな花束でもプレゼントして驚かせてやろう。

年齢よりも小柄で童顔なケヴィンは自分の容姿をマイナスには考えていない。それは人をあつと言わせるのが好きだからだ。ケヴィンが容姿に似合わない事をすれば、誰もが驚いたような顔をする。それを見るのが楽しくて堪らないのだ。

新たな標的を見つけたケヴィンは、受付の女性がどれほど大きな花束を受け取れば目を丸くして驚くかを考えながら、彼女に教えられた階段を鼻歌交じ

りに上った。

「皆さんにとってこの一ヶ月の研修が実り多きものである事を心から願っています」

長々と続いた挨拶がようやく終わると、研修生達が工部総監に拍手を送る。そんな彼らに合わせるようにして、ケヴィンも適当に手を叩いた。

総監の話はハッキリ言ってつまらなかった。省のトップに君臨する人間ならば、もう少しマシな挨拶をして楽しませてくれるかもしれないと期待していた。だが、とんだ期待外れに終わった。

——これならうちの学長の方がマシだな……。

いち早く拍手を止めたケヴィンが欠伸を噛み殺す。

そんな中、不意に工部総監がこちらを向き、目が合ってしまった。

——マズイ、欠伸しそうになったのがバレたか？

初っ端から叱られるのは御免だ。そう思ったケヴィンは、それぞれの研修部署に散っていきこうとする

研修生に紛れて、そそくさと部屋を出ようと試みる。だが、あともう一步で部屋を出られる、という位置に來た時、先ほど下らない話をし続けた男の声が背後から聞こえた。

「君、ちょっと待ちなさい」

声を掛けられたただけなら聞こえなかったフリをして立ち去れたのだが、如何せん肩を叩かれてしまった。ケヴィンは心の中で舌打ちをし、何食わぬ顔で背後を振り返った。

背後に立っていたのは、やはり工部総監だった。

しかし、何となく彼の様子がおかしい。工部総監は、何かが腑に落ちない。そんな顔をしてケヴィンの顔を覗き込んでくる。

——なんだ、こいつ……？

工部総監の表情を不可解に思ったケヴィンが、首を傾げると、彼は小さな声で話し掛けてきた。

「君、名前は？」

「キム・ケアードです。総監」



さも、総監に話し掛けられた事が嬉しい。そんな顔をして平然と偽名を名乗ると、総監は少し考える風にしてから小さな声で再度問い掛けてきた。

「気の所為かもしれないが、何処かで私と会った事はないかね？」

「え？」

——マズイ。こいつオレの顔を知っている？

公のパーティーには顔を出さぬ主義だが、一度も参加した事が無いわけではない。もしかしたら、工部総監と何処かのパーティーで会っているのかもしれない。

自分が偽名を騙っているのがバレたら書類の回収どころか熱力学の本も手に入らなくなってしまう。

そんな事になったら大変だ。

ケヴィンは、総監の記憶が曖昧なのをいい事に、愛想笑いを浮かべた。

「あの……以前、学院の式典に出席なされた事がございますよね？」

「ん？ ああ、今年の入学式には招待され、出席したな」

——しめた。

王立学院の建築学部は、毎年大量の人材を工部省に入省させている。だから工部総監ならば必ず式典に出席しているはずだ。そう思ってあてずっぽうに言って正解だった。

ケヴィンは、話に乗ってきた総監に、少々照れくさいような作り笑いを向けた。

「その入学式に僕も出席していました」

「ああ。あの時、私に声を掛けてきた新入生がいたな。君はその子だったかね？」

「いえ、僕なんかが声を掛けるなんてとんでもない事です。僕はその子の後ろで憧れの総監を見ていただけです」

「憧れの？ 私が？」

工部総監が驚いて目を瞬く。ケヴィンは照れた演技を続けたまま、小さく頷いてみせた。

「はい。僕はずっと工部省に入省するのを夢見てきました。ですから、省を治める総監は僕の憧れです。お会い出来た上、お声まで掛けて頂けるなんて光栄です」

「そうか。いや、私も君に会えて嬉しいよ。卒業後には、是非工部省に入省してくれたまえ」

「はい、頑張ります！」

「期待しているよ」

そう言って肩を軽く叩いてくる総監は上機嫌の笑みを浮かべている。そんな総監の笑みを見ながら、ケヴィンは心の中で呟きを漏らした。

——単純な男だ。こんな間抜けが総監なんて国家機関はどうなっているんだか……。

2

「えっと……二階の真ん中の部屋は……」

工部総監を上手く誤魔化したケヴィンは、階下に

下り、廊下を見回した。

長い廊下の片側にはずらりと扉が並び、その扉には部名の書かれたプレートが貼り付けられている。

ケヴィンはそのプレートを一つ一つ確認しながら廊下の奥へと向かった。

廊下の中央辺りに来ると、右手に明り取りの為の中庭が見下ろせるように窓がついている。その窓から入る光を受けた左手にある古い木製扉のプレートに、ケヴィンが研修を受ける事になっている部名が書かれていた。

——設計・施工部。ここか。

キムの父親ハワード・K・グレアム氏は、この扉の向こうで日々を過ごしていた。優秀だが温和で大人しい性格をしていた彼は、出世には興味を示さず、常に縁の下力持的な存在で、典型的な職人気質の人間だったらしい。

そんなグレアム氏が秘かにケヴィンの父親に近付いた。しかも、宰相である父親と王の側仕えをして

いる兄が喉から手が出るほど欲しいと思われる書類を引っさげてだ。

それはどう考えても異常な事だ。温和で大人しいはずの人間が、行政の重鎮を右往左往させる情報を引っさげて現れるなんて考えにくい。もしもそれが本当だとすれば、何らかの理由があったはずだ。

——職人としてのプライド、とかか……？

思いつくのはその事に関してだ。父親はグレアム氏に会った時の感想として、グレアム氏は職人氣質が強い人間のように思えた、と言っていた。父親の人を見抜く目は確かだから信じられる。恐らく、グレアム氏は本当に職人氣質の強い人間だったのだろう。

職人氣質が強い人間の中には、それを傷付けられた場合、報復行為に走る者がいる。とすれば、グレアム氏が父や兄に渡そうとしていた書類は……。

そこまで考えて、ケヴィンは左右に首を振った。書類の中身が何であろうとケヴィンには関係のない

事だ。いや、下手に首を突っ込むのは得策ではない。それこそ父親や兄の思う壺になってしまうかもしれない。

ケヴィンは、もう一度ブンブン頭を振り、グレアム氏の残した書類の事を頭の中から完全に追いやつて、ノブに手をかけた。

そっと扉を開いて中に一歩足を踏み入れる。その途端、直ぐ目の前に立っていた赤毛の派手な女性と目が合った。

彼女は花瓶の水を替えに行く所だったのか、手には赤いチューリップを生けた花瓶を持っている。その可愛らしい花とは不釣り合いなほど妖艶な女性を見上げ、ケヴィンは首を捻った。

「あなたにはチューリップは似合わない。あなたには真紅の薔薇がいい。最も、その薔薇でさえあなたの美しさに霞んでしまうでしょうが」

「うふふ、ありがとう。あなたも素敵よ研修生君」いきなり不躰とも思える科白を口に出して言うと、

目の前に立つ赤毛の女性はその美しさに磨きをかけるような妖艶な微笑を浮かべた。

反応から見て彼女はとても社交的で、そしてこの手の科白を言われ慣れている。更に、即座にケヴィンの身分を言い当てた事から人を見てくれで判断しない人物のようだ。

——こういう女の情報は当てになる。あとで利用させてもらおう。

心の中でほくそ笑んだケヴィンは、正反対の善良な笑みを彼女に向けた。

「キム・ケアードです。よろしく」

「アデラ・ストレイスよ。可愛い子は大歓迎だわ」

ケヴィンが偽名を名乗り、握手を求めると、アデラと名乗った女性は側にある机に花瓶を置き、手の甲を差し出してきた。

——なるほど、どんな場合も女である事を望むタイプの人間か。

差し出された手の甲を見て即座にそう判断したケ

ヴィンは、彼女の手を取って甲に軽く口付けを落とした。

「ふふ、あなたのような紳士は大好きよ」

「光栄です」

——オレの事を気に入ってくれたのなら有り難い。早速昼食に誘って情報収集をさせてもらおう。

そう思って顔を上げた瞬間、ケヴィンは目を大きく見開いた。

アデラの背後にヌツと現われた長身の男が、呆れたような顔をしてこちらを見つめてくる。男はケヴィンと目が合った途端、大きな溜息を漏らし、口を開いた。

「研修生第一号がこんなチビ助とはな」

——こいつはガッツリ人を見た目で判断する間抜け男だな。

相手が女なら優しく接してやってもいいが、男の場合は後でからかう面白さが無い。ケヴィンは、呆れたように溜息を漏らし、男に向かって嫌味な愛想

笑いを浮かべた。

「キム・ケアードです。よろしくお願いします」

「キム・ケアード……？」

名乗った途端、男は何故か胡散臭げな視線を向けてくる。いや、それよりも気になるのは彼の瞳に浮かぶ警戒心だ。

——何だこいつ何をそんなに警戒しているんだ？  
ただの間抜けじゃないのか？

不可解な男の眼差しに、にわかにケヴィンの中で警鐘が鳴り始める。そんな中、男の背後から髭を蓄えた偉そうな男が顔を覗かせた。

「ん？ この子は誰だね？」

「あ、部長。この子が研修生のキム・ケアード君です」

「君が？」

アデラの紹介に部長は目を丸くしたが、直ぐに表情を改めて満面の笑みを浮かべ、揉み手を始めた。

「そうか、君がキム・ケアード君か。聞いているよ、

君は王立学院始まって以来の天才なんだってね。何でも高名な建築家にアドバイスするほどの見識の深さとか。いやあ、そんな素晴らしい人材を研修生として迎え入れる事が出来るなんて光栄だよ。ささ、こっちに來たまえ、皆に紹介しよう」

——父上め、親友であるのをいい事に、学長に何という身上書を書かせていやがるんだ！ オレの専攻は物理学だぞ、建築学なんて専門外だ。直ぐに正体がバレてしまうじゃないか！！

部長に腕を引っ張られながら、ケヴィンは心の中で父親に毒づき、口元を引き攣らせた。

設計・施工部の部長に皆の前でとんでもない紹介をされたケヴィンは、これから先の事を思っただけで背中を冷や汗をかいた。だが、不幸はそれだけではなかったのだ。ケヴィンは目の前に立つ男を見上げ、更に、どんよりとした気分になった。

男は先ほどケヴィンに胡散臭げな視線を投げてき

た者だ。しかも、彼は未だにありありと警戒心を瞳に浮かべている。

——よりもよってこの男がオレの指導員だなんて最悪だ。こいつ絶対オレの正体に勘付いてる。

それは単なる勘でしかない。だが、警戒心をありありと映し出す男の瞳を見ていると、そうとしか思えない。

ケヴィンは、男の顔を何食わぬ顔で見ながら、必死に何処で会ったのかを思い出そうとする。そんな中、横合いに立つ部長の声が耳を掠めた。

「ケアード君、彼はローランド・ラングリッジ。分らない事があつたら全て彼に聞きなさい」

——こいつがローランド・ラングリッジ……。

マズイ事になった、とケヴィンはギュツと両手を握り締めた。

ローランド・ラングリッジといえばグレアム氏が鍵を預けたであろうと思われる人物だ。

仕事人間のグレアム氏は極端に交友関係が狭かつ

た。そんな彼が、弟子として手塩にかけて育てた者が二人いる。その一人が、このローランド・ラングリッジなのだ。

だから、サイラスはグレアム氏と接触の多かったローランド・ラングリッジが鍵を持っているであろうと結論付けた。その結論にケヴィンも異論はない。

だが、まさかそのローランド・ラングリッジがケヴィンの指導員になるなんて思ってもみなかった。

しかも、彼はケヴィンの正体に気付いているような素振りを見せている。

——マズイな。既に正体がバレているとなれば、キムとして近づく事は愚か、偽名で潜入したのが裏目に出て警戒され、近づくき辛くなる……。

この潜入は初っ端から失敗だったのかもしれない。そんな思いがケヴィンの心の中に浮かび上がる中、暢気な部長がバシリとローランドの背中を叩いた。

「ラングリッジ君、大切な研修生だ。粗相の無いように頼むよ。彼のリクエストは出来る限り聞くよう

にね。それじゃ頼んだよ」

「……分りました」

ローランドが頷くと、部長はケヴィンに愛想笑いを投げ掛けてから席へと戻って行く。一人ローランドの側に残されたケヴィンは、脳裏に熱力学の本を思い浮かべ、それが徐々に遠ざかって行く寂しさを感じていた。

——こいつから鍵を奪って書類を手に入れなければ本は手に入らない。何とかしなければ。

絶対に本を諦めるわけにはいかない。ケヴィンはそう心に決意し、前を歩くローランドの背中を睨み付けた。だが、ローランドがそんなケヴィンの決意を知るはずもない。彼は廊下の最奥にある扉を開き、さっさと中へ入っていつてしまった。

——入るなら入るって一言言えよ……。

なんだかやる気が削がれてしまったケヴィンは、心の中でブツブツ文句を言いながらもローランドの

後に続いた。

「ここが会議室だ」

「はあ……」

ローランドの後に続いて足を踏み入れた場所は、特大の長机が部屋を中心にある大きな部屋だった。

今、ローランドは工部省の中を案内すると言ってケヴィンを連れまわしている。さっき見た食堂やちよつとした打ち合わせに使う小さな部屋などは案内する必要があるのかもしれない。だが、こんな大きな会議室を研修生であるケヴィンが使う事なんてまずないだろう。

——こういう関係のなさそうな部屋にオレを連れ込んでなにをしたいんだか……。

ケヴィンは、ここに連れ込まれた意図を考えながら、ゆっくり背後を振り返った。その瞬間、パタンと静かな音を立てて出入口の扉が閉められる。扉を閉めたローランドは、その前に立ちはだかるように立ち、警戒心の強い眼差しでケヴィンを見下ろして

きた。

「ラングリッジさん、凄く立派な会議室ですね」

愛想笑いを浮かべて言ってみたが、ローランドは笑わない。それどころか彼は更なる警戒心を全身から漲らせ、ケヴィンに歩み寄ってきた。

「何故、偽名を使って工部省に潜入した？」

「は？ いや、別に偽名なんか……」

迫り来るローランドに惚けて見せると、彼はズイと顔を近付け、ケヴィンの顔を覗き込んできた。

「お前の本当の名前はケヴィン・クラレンス・オルソンだ。以前、俺の家のパーティーに出席しているだろう。その時、親父からお前の正体は教えてもらった。さあ、偽名を使った訳を話せ」

異常なまでの警戒心がローランドから伝わってくる。彼がこれほどまでの警戒心を露にするのには理由があるはずだ。それを考えて、ケヴィンはハツとした。

——この男、もしかしたらグレアム氏が何を隠し

たのかを知っているのかもしれない。いや、師弟の間柄ならグレアム氏がローランドに言っている可能性もあるな……。

ローランドが全てを知った上で鍵を預かっているのならば、この警戒心も頷ける。偽名を使って工部省に潜入した者があると気付けば、真っ先にグレアム氏が隠している書類を狙っているのだと彼が考えるのは自然な事だ。

しかし、ケヴィンをオルソン家の人間と知って尚、警戒心を露にするのはおかしい。グレアム氏は元々、書類をケヴィンの父親に渡す事を予定していたのだから。

——可能性は二つあるな。

一つはローランドが書類を誰に渡すのかを知らない場合だ。その場合、彼は怪しい者全てに警戒心を抱くだろう。そして、もう一つの可能性は、彼が敵側に寝返ったという場合だ。この場合、ローランドにとってオルソン家の人間は敵という事になる。そ



うなるとケヴィンの身は危険に晒される事になるだろう。

——どっちだ？

睨み付けてくるローランドの目を見ながら、ケヴィンは思考を巡らせた。

兄サイラスから貰った調査書に寄れば、ローランドは敵側とは一切接触していないと書かれていた。

——サイラスの調査を信じるべきか否か……。

兄のやる事に手拔かりは無いはず。そうは思うのだが、はなからそれを信じて行動するのは軽率だ。やはりここは何としても誤魔化すべきだろう。

結論が出ると、ケヴィンは観念の苦笑を浮かべ、肩を竦めてみせた。

「バレちゃいましたか。そうです、僕はキムではありません。あなたの言う通りケヴィンです。けど、これには事情があるのです」

「何だ、その事情ってのは？」

相変わらず警戒心を崩さないが、ローランドは事

情を知りたがった。どうやら彼が敵側に寝返ったという事はなさそうだ。寝返っているのならばケヴィンの事情なんてどうでもいい事であろうから。

そう判断したケヴィンは、完全に地に戻って嘘八百を並べたてた。

「学長に頼まれたんだ。オレは嫌だったんだけど、キム・ケアードが腕の骨を折っちゃってさ。完治に一ヶ月以上かかるっていうんでオレが代理になったわけ。けど、あいつって凄く優秀だろ。今更、違う人材なんかに変更したら学院の信用に係わるっていうんで偽名を騙る事になったんだ。オレとしても迷惑な話なんだよ」

「……そんな話が信じられるか。だいたいあの堅物の学長がそんな事をさせるわけが無い」

——ふうん。やっぱりこいつ馬鹿じゃないんだ。

ローランドは嘘を見抜いた。だが、彼は一つ過ちを犯した。自ら学長の性格を知っていると言ってしまった事だ。それは即ち学院の出身であるとバラシ

たようなものだ。そして、学長を擁護した事から、彼が学長に好感を持っている事が伺える。

——利用させてもらおう。

心の中でほくそ笑んだケヴィンは、大きな溜息を漏らし、肩を落としてみせた。

「学長だってオレにこんな事を頼みなくなかったんだ、悪いのは工部省の方さ……」

「なに？」

ケヴィンの呟きに、ローランドが片眉を上げる。

食いついてきた彼にケヴィンはしてやったり、と心の中で強かな笑みを浮かべた。

「学長はキム・ケアードが骨折した時点で研修生の変更を工部省に打診したんだ。けど、工部省はそれを聞き入れなかった。キム・ケアードが来なければ研修制度自体を止めにするって脅してきたんだ。建築学部には他にも優秀な学生がいて、彼らの中には工部省に研修に来る事を望んでいる者も多い。だから、学長としても仕方が無かったんだよ」

「工部省がそんな事を……？」

半ば信じられないという顔をするローランドに、ケヴィンはダメ押し of 言葉を紡いだ。

「信じる信じないはあんたの勝手だけど、さっきの部長の態度見ただろ。単なる学生に揉み手なんかしちゃってさ。キム・ケアードはそれほど優秀な学生なんだよ。工部省としては是が非でも欲しい人材なんだろうね」

「……」

ケヴィンのダメ押しに、ローランドが押し黙る。さっきの部長の態度を目の当たりにした為に、信じ気になったのだろう。

——父上の嘘もたまには役に立つな。

心の中でほくそ笑んだケヴィンは、もう一押しする為に、ローランドの胸に飛び込み、彼に抱き付いた。

「お、おい？」

慌てたような声を出すローランドを見上げ、ケヴィ

インは泣く寸前の顔を作ってみせた。

「お願いだよ。オレの正体をバラさないでよ。この研修を成功させないと、オレ、学院を追い出されちゃうんだ。オレ、専攻は物理学なんだけど、この前、実験中に爆発事故を起こしちゃって研究室を一つダメにしちゃったんだ。この研修さえ上手くやればその事を不問にふしてもいいって言われてさ、それでこんな事やっているんだ」

「研究室の一つや二つ、お前の親父さんに頼めば何とかしてくれるだろうが」

素っ気無く言ったローランドが、グイグイ肩を押してくる。ケヴィンは離れてなるものかと、抱きつく腕に力を込めた。

「そんなこと父さんに言ったら殺されるよ！ オレの父さん世間では人当たりがいいって評判だけど子供には凄く厳しいんだ。子供の頃、ちょっと悪さしただけで縄で縛られて木に吊るされた事があるんだ。研究室吹っ飛ばしたなんて言ったら何されるかわか

んないよ！」

「木の上から……」

必死の形相で叫ぶと、ローランドは信じたのか顔色を変えた。ケヴィンは、すかさずローランドの胸元に顔を埋め、泣いているように垂れてもいない鼻を幾度もすする。

「……お願いだよ、オレの事少しでも可哀想だと思ったら、偽名を騙っている事は黙っていてよ」

「分った。言わないから離せ……。そして、そのわざとらしい嘘泣きをやめろ」

——あれ、バレてるよ。やっぱり役者のようにはいかないか。

ケヴィンはローランドから少し離れ、ポリポリ顎を掻いた。

「あのさ……泣いたのは嘘だけど、話は嘘じゃないよ」

「どうだか。だが、話半分には聞いておいてやる。特に研究室を吹っ飛ばしたあたりは、お前なら有り



得そうな話だ」

「何それ、信じたのはそこだけかよ？」

「ああ、そうだ。それに、学院の学長に迷惑をかけるわけにもいくまい。学長の顔に免じて皆にはお前の正体を黙っていてやる」

ローランドはフンと鼻を鳴らして顎を上げる。

学長の名を出したのは成功だったが、ローランドははなからケヴィンの話しを信じる気などないようだ。

一筋縄ではないかない男の前に、ケヴィンは最後の手段を思いつく。気は進まないが、この男には最も有効な手段かもしれない。そう思ったケヴィンは、思い切りジャンプしてローランドの首に腕を回し、「ありがとう」と謝辞を述べつつ彼の唇に自分のそれを重ねた。

3

横合いから向けられるちらりちらりと伺うような

視線が気にかかる。その視線を視界の端に、ケヴィンは心の中でほくそ笑んだ。

——やっぱり最終手段が効いたか。にしてもさっきのローランドの反応は面白かった。

視線を向けてくるローランドに見えないように横を向き、ケヴィンはフツと口元を緩める。

口付けをした直後、ローランドは身体を硬直させ、ケヴィンを振り払い、そして驚きに目を見開きながらも微かに頬を赤らめていた。

兄から貰った調査書には、ローランドは結構な遊び人で、男女お構いなしと書かれていた。だから相当ふてぶてしい男なのかもしれないと思っていた。だが、実際はそうではないのかもしれない。まあ、ケヴィンが子供くさいから驚いた、という可能性は拭いきれないが、ひよっとすると彼は意外にシャイな面を持っていたりするのかもしれない。

そうだったら少しだけ面白い、とケヴィンは強かな笑みを浮かべた。

大の男を手玉に取った経験はないが、そういう遊びの要素は必要だ。何せ、こんなつまらなく、無意味な仕事はただでさえやりたくないのだ。だが、少々、遊び的な要素が入れば少しはやる気も出るだろう。

それに、今回の場合はそれが有効な手段になり得るかもしれない。既にローランドには正体がバレてしまったのだから、グレアム氏の隠し子として近づく事は出来ない。だが、ローランドがケヴィンに性的な意味で興味を持てば、警戒心の強い彼も気を緩める公算は高い。

——警戒心が強くても男は男。色仕掛けで迫れば意外に早く落ちて鍵を渡してくるかもしれないな。どれ、さっきの事でどれだけオレに興味を持ったか少し試してみるか。

そう考えたケヴィンは、顔を正面に戻し、チラリとローランドに視線を流した。

その途端、ローランドが慌てたように顔を背け、

視線を机の上に置いてある書類に向ける。なんとも幼い反応に、ケヴィンは噴出しそうになるのを堪えるのがやっとだった。

——何か楽しいぞ、この男。少しからかってやろうかな？

悪戯心を煽られたケヴィンは、わざと隣に座るローランドに身体を寄せ、彼の耳元に囁きかけた。

「あのさ、ローランド……」

わざと耳に息を吹きかけてやると、ローランドはサツと耳に手を当て、不愉快そうな顔をこちらに向けた。

「お前な、名前で呼ぶなよ」

「いいだろ、もう普通の関係じゃないんだから」

「なっ——」

小声に小声で返してやると、ローランドは驚きに目を見開き、絶句したまま口をパクパクさせている。

——本当に可愛い奴だな。

強かな笑みを浮かべたケヴィンは、ダメ押しとば

かりにローランドに向かって唇を尖らせ、チュッと音をさせた。その途端、ローランドが椅子をガタンと鳴らして立ち上がる。怒らせてしまったかと思っただが、彼は視線を反らしたまま呟いた。

「昼飯の時間だ。行くぞ」

「え？」

言われて周囲を見回してみると、皆が席を立ち、思い思いの人に声を掛け、出入口へと向かって行く。更に壁にかけられた時計に目をやると、時計は一二時を指していた。

——ちえっ、もう少し遊んでやろうと思ったのにな。でも、まあいいか、少なからずローランドはオレの事を気にしているみたいだし。

心の中でほくそ笑んだケヴィンは、視線をローランドに戻し、肩を竦めてみせた。

「ゴメン。オレ、ストレイスさんとさつき約束しちゃったんだ」

「……そうか」

チラとこちらに視線を向けたローランドは、妙に面白くなさそうな顔をする。そんなローランドに、ケヴィンはニヤリと嫌らしい笑みを向けた。

「何だよ、オレがストレイスさんと昼食に行くのが面白くないのかあ？」

ニヤニヤしながら言っていると、ローランドはいきなり不敵な笑みを浮かべ、鼻で笑った。

「そんなんじゃない。お前は怪しいから目の届くところに置いておこうと思っただけだ。だがまあ相手がアデラなら問題はない。せいぜい正体がバレないように気を付けるんだな」

言ってローランドは後ろ手に手を振りながら部屋を出て行った。ケヴィンは、ローランドが出て行った扉を見つめ、考える風に口元に拳を当てる。

ローランドの残した言葉が妙に気にかかる。もしかしたら、アデラは自分が思っている以上に頭のいい女なのかもしれない。

——少し気を引き締めて情報収集する事にしよう。

ケヴィンは心の中で自らに言い聞かせ、席を立ち、  
アデラの席へと向かった。

“捻くれ者の恋（体験版）”をお読み頂きありがとうございました。体験版でのお試し読みはここまでとなります。ようやく主人公ケヴィンの相手、ローランドが登場したばかりの所で心苦しいのですがご容赦下さい。

体験版をお読み頂いた上で、製品版の購入をご検討頂ければ幸いに存じます。

Imagination's Block へのへの拝